

34 【ばたばた】

いつだったか、季節の記憶はない。

しかし、おぼけはみんな、季節や天候や風景などなど、自然とともに記憶がある。

そのはずです。

だからこのおぼけは、ほんもののおぼけではないかもしれない。

ただ、懐爺の記憶はあります。

あのときの懐爺は、いつもよりさらに魅力倍増、べつの言い方をするなら、口八丁手八丁倍増でしたから。

「せつないのう」

ぼくはいいました。

「こんどはなんですか」

懐爺はききました。

「ばたばたばたばた、うるそうて、しゅくだいできん」

ばたばたばたばた

ばたらんばたばた

ばたばたばたらん

ばたばった

「金ちゃんも、宿題なんかするんですか」

「わしは、ゆうとうせいじゃ」

「ごめんごめん。わたしのところに優等生なんかこないと。先入観はいけませんね」

「せんにゆうかん、たあ、どんなおぼけじゃ」

「なるほど。先入観も、おそろしいおぼけかもしれせん」

「そんなことより、ばたばたじゃ」

ぼくはさげびました。

「そのとおり、それは【ばたばた】というおぼけです。金ちゃんの好きな、いえ金ちゃんを好きな擬音語のおぼけです」

懐爺の答えはたいへん早いものでした。

早すぎた。

このごろ、妙な疑念（ぎねん）が頭をよぎっていました。

懐爺はなんでもかんでも、おぼけにってしまうのではないか。

だいたいぼくが、

「ばたばた」

といたら、すぐに、

「それは【ばたばた】というおぼけです」

と答えるのは、安易（あんい）すぎる。

安易という言葉はまだ知らなかったとしても、そういう感じがしたのです。

もし、

「ぶたぶた」

といたら、すぐに

「それは【ぶたぶた】というおぼけです」

と答えるかもしれない。

もし、

「きんきん」

といたら、すぐに

「それは【きんきん】というおぼけです」

と答えるはずだ。

となると、もし、

「きんちゃん」

といたら、すぐに、

「それは【きんちゃん】というおぼけです」

と答えるにちがいない。

あの音は、外れかけた納屋の戸が強風で鳴る音かもしれないし、隣の家でまとめて捨てた新聞紙が風に煽（あお）られて飛んできた音かもしれないのに。

「もしかすると」

ぼくはためしに、きいてみました。

「もしかすると、かいじいはさ、わしのために、なんでもおぼけにしとるんじゃろ」

「ばれましたか。さすがは金ちゃん、金太郎よりすごい。でも【ばたばた】というおぼけは、ほんとにいるんですよ。他の村では【たたみたた

き】とって、畳を叩く音に似ているとか」

「そういえば、わしのきいたおとも、たたみたたくおとじゃった」
そこまでの記憶はない。

しかし懐爺のために、そういったのです。

懐爺はうれしそうに、乱杭歯をむきだしにしました。

懐爺がうれしそうにすると、理屈なくぼくもうれしいのです。

さらにぼくは懐爺に、難問をぶつけました。

「【ばたばた】なんか、おとがつまらん。【びたびた】なんてのが、うすきみわるいのう」

「そんなこというと、おぼけがきいて、知恵つきますからご注意を」
懐爺は、意味深な笑いを作りました。

「いみが、わからん」

ぼくはいいました。

懐爺はわざとらしい咳をしたあとで、こんな話をしました。

「昔むかし、太田道灌（おおたどうかん）という偉い武将がおりました。その領内の山里に、巨大なきのこが一夜で生え、みなは物怪（もののけ）だと大いに騒いだのです。そのとき道灌さんは、決して物怪ではない、湿気の多いところには大きなきのが生えるのだ、とみなを諭しました。そうしてもし逆さまに生えていたなら不思議だろうが、といいました。その後、こんどはきのが逆さまに生えていて、みなが大いに騒いだのです。そうしたら道灌さんは、最初から逆さまに生えれば不思議だが、拙者が知恵つけてから逆さまに生えたのでは笑止千万、と答えたということ」

ぼくにはよくわからない。

わからないなりに答えたものです。

「なら、わしが〈どんどんどん〉なんていうと、【ばたばた】が〈どんどんどん〉にばけて、でてくるってか」

「まあ、当たらずとも遠からずですか」

「なら、ちえつけてやるべえか」

ぼくは強がっていいました。

「やめてください金ちゃん。〈どんどんどん〉なんておそろしい音、ききたくないですから」

懐爺は、ふるえるふりをしました。

「かいじいは、よわむしじゃな」

ぼくは嫌味をいいました。

「わたしは、じつは、弱虫です」

懐爺が勝手に認めてしまったので、ぼくはこの話をやめにしました。

もちろん、懐爺を弱虫だとおもったことは、一度もありません。